

・チャールズ・アイヴズにおけるアメリカ的要素——交響曲第2番を中心に

概要

アメリカ人作曲家はヨーロッパで音楽を学ばなければならないと考えていた。特に 1930 年代、ヨーロッパから多くの作曲家が渡ってきたこともあり、こうした考えが強まった。しかしながらアイヴズはヨーロッパで音楽を学ぶこともなく、父ジョージとパーカーに学び、本業として作曲家になることはなかった。それにもかかわらず複調や無調、変容するリズム、トーン・クラスター、独特な楽器編成やその配置、既存の音楽の模倣や引用、標題性などの革新的な作曲技法を用いており、20 世紀の前衛音楽の先駆をなすことができたとみなされている。

アイヴズは引用を多くの作品で使っており、交響曲でもこの技法は見られる。引用の集大成といわれているのは交響曲第 4 番であり、第 1 番、第 2 番はパーカーから学んだ型にはまった作品、第 3 番は最も規模の小さい作品といわれている。このため引用における先行研究ではほとんどが交響曲第 4 番を対象としており、引用部分をいくつか取り上げて論じているのにとどまる。本論文では様々な形の引用部分を取り上げ、形式的枠組みとの関わりを考察するために、交響曲第 2 番が適していると思い、第 2 番を研究対象として選んだ。ただ単に、引用を用い各パートが層を作っていることや、超越主義者としてのアイヴズを論じるのであれば、第 2 番ではなく第 4 番が適しているようにも思われる。だが、引用を使い始めた管弦楽作品が第 2 番であり、パーカーから学んだ形式にアメリカの旋律を組み込ませているからである。また本論文ではアメリカ的要素を引用と考えた。アイヴズは第 2 番においてアメリカらしいインパクトのある作品を書こうとしたわけではい。伝統を受け継ぐために、ヨーロッパの音楽史にアメリカの芸術音楽を登場させ存在を明らかにさせるために書いている。よって他のアメリカ人作曲家のようにヨーロッパへ渡らないまでも、形式的枠組みを学ぶことへの必要性を感じ、形式的枠組みにアイヴズの独自の様式、つまり、アメリカ的要素を取り入れていったのである。

交響曲第 2 番にもアメリカの旋律を中心に多くの引用曲が使われ、直ちに分かるものから、完全に溶け込ませているものまで様々な形で引用曲を見ることができた。これらはある程度の発展の可能性を持った形で使われており、時にはモチーフの素材として、時には旋律として、時には対位的に扱われた副旋律として形式的枠組みに当てはめられている。そして使い方はどうであれ、複数の楽章にまたがって使われ、最終楽章ではすべての引用曲が現れ、作品自体に一貫性を見ることができる。さらにアイヴズの他の作品と同様

に使われる引用曲の箇所や使い方、層の作り方など類似点をも確認することができた。

本論文では先行研究をもとに、引用曲を明らかにした。そして引用曲がどのパートで演奏されているかを図式化した。そうすることで、頻繁に使用される楽器や引用部分の長さが明確になり、クライマックスで、いかに引用曲によって層をなし、引用曲が長く使われているかが視覚的にも確認できる。

本論の構成は以下のようにした。

まず第1章では、アイヴズは19世紀末から20世紀初期に作曲活動を行っているが、作品はそれ以降の革新的技法を用い、同時代の作品を聞いていなかったことから、あえて20世紀前半のアメリカの動向を踏まえて考察する。そして、20世紀前半のアメリカ人作曲家を数人取り上げ、アメリカにおける交響曲の作風を明らかにする。

続く第2章では、他のアメリカ人作曲家とは異なり、ヨーロッパへ留学することもなく、さらには日曜作曲家として生涯を送ったアイヴズの生涯を音楽様式や形式、音楽哲学、親族関係、生活、学び、働いた場所などから6つに区分して考察する。さらに番号付きの4つの交響曲は作曲活動の生涯にわたって書き続けたジャンルなので、作曲様式の変遷とそれぞれの特徴を明らかにしつつ交響曲第2番の位置づけをした。

最後に第3章の分析において、使われているアメリカの旋律を提示し、その形式的枠組みとの関わりを明らかにする。

以上の分析から得られた結果によって、最後にアイヴズの交響曲第2番の位置づけをおこなった。